

# 石垣在郷友会の研究

田 島 康 弘

(2003年10月16日 受理)

## A Study of Voluntary Associations in Ishigaki Island

TAJIMA Yasuhiro

### 要 約

本研究は、石垣島の郷友会について、奄美の郷友会を念頭に置きつつ、その実態や特色を検討したものである。石垣島の郷友会という場合、2つの意味が考えられる。その1つは、石垣島の人々が石垣島の外でつくる郷友会であり、もう1つは、石垣島に存在する外から来た人びとによってつくられた郷友会である。本研究はこのうち、主として後者を中心としたものである。郷友会の形成は人口移動が前提になっている。そこで、石垣島に入って来た人の動き、および石垣島から出ていった人の動きについて把握した。その際、石垣島からの出郷者がつくる郷友会についても、若干の検討を行った。石垣在郷友会では周辺八重山離島民により形成された郷友会を中心に扱ったが、その結果、これらの郷友会では、とくに奄美の郷友会と比べると、母村とのつながりがきわめて強いこと、多くの会で「親睦大運動会」が会の中心的な活動として位置付けられ、しかも、これが非常に活発であること、などの特色があることがわかった。

キーワード：八重山離島 石垣人 沖繩本島 親睦大運動会 西表郷友会

### 目次

#### 第1章 研究目的

##### 第1節 はじめに

##### 第2節 郷友会の概念

#### 第2章 石垣島の人口移動

##### 第1節 石垣島への人口移動

##### 第2節 石垣島から島外への人口移動

#### 第3章 石垣在郷友会の分析

##### 第1節 石垣在八重山諸郷友会の現状

## 第2節 石垣在八重山郷友会をめぐる諸問題

### 第4章 結語

## 第1章 研究目的

### 第1節 はじめに

2003年の夏、奄美に約2週間、沖縄に1週間滞在する機会を得た。とくに沖縄では、本島のみでなく宮古、八重山まではじめて足を延ばすことができた。この調査旅行の基本的目的は「市町村合併問題」であり、この件については別稿で扱う予定であるが、はじめての宮古、八重山行きとあって、筆者は従来からのテーマであった郷友会関係のこともぜひ調べようと考え、この方の資料収集もあわせて行った。本報告はこうして収集した資料の整理を基礎とし、この他の聞き取りや帰鹿してから集めた資料、手持ちの資料等に基づいて、沖縄県の郷友会、とくに周辺離島から石垣島に移住した人びとによって結成された石垣在郷友会を中心に、現時点でわかり得る範囲で、幾つかの特徴を整理したものである。

筆者は従来、奄美の郷友会について考察を重ねて来たが、沖縄の郷友会については初めての報告であり、必ずしも十分な資料収集や独自の詳細な調査を行ったものではないが、奄美の郷友会との比較など、大変興味ある研究対象でもあり、研究の視野をさらに広げることにもなるので、現時点での一定の整理をぜひ行いたいと考え、ここにまとめるものである。

第1章では、研究の目的や郷友会というものの概念の若干の整理を行う。第2章では、石垣郷友会を検討する際の基本的な前提となる、石垣島をめぐる人びとの移動の概況について整理する。そして第3章で、石垣島周辺離島民により結成された石垣在郷友会について検討し、第4章で奄美の郷友会と比較しつつまとめを行いたい。

### 第2節 郷友会の概念

ここでは、郷友会の概念について若干の整理をしておく。

石垣の郷友会と言った場合、2つの意味がある。1つは石垣島なり石垣市なりにつくられて、存在している郷友会の意味であり、もう1つは、石垣島の人によりつくられている、沖縄本島や日本本土にある郷友会の意味である。本稿では、前者を石垣在郷友会と呼び、後者を石垣人（による）郷友会と呼ぶことにする。一般に、郷友会についてこうした区別がきちんとなされてはいないと言えよう。

つぎに、石垣在郷友会の中も2つの種類の区別ができるように思う。その1つは、石垣島周辺離島民が石垣島に移住し、彼らがつくった石垣在郷友会であり、もう1つは、これ以外すなわち宮古や沖縄本島からの移住者によりつくられた石垣在郷友会である。この2つの中では前者がより基本

的なものと言えようが、後者も現実には存在しており、郷友会研究に1つのヒントを与えている存在であるようにも思われる。

つぎに、石垣人郷友会の方も、幾つかの検討すべき点を含んでいるように思う。石垣人郷友会は基本的には沖縄本島においてつくられ、さらに、関東、関西など日本本土の大都市部で形成されるという形態をとる。この場合、沖縄本島は一般に考えられるとしても、本土では、一般的には都市部ではあってもそのどこに形成されるのかは、必ずしもはっきりしていない。石垣人の移住者の数の多少が基本的条件となるであろうが、検討すべき課題の1つかと思われる。

検討すべきもう1つの問題は、ここでの石垣人の内容である。のちに見るように、現在の石垣島民もずっと昔からの固定した居住者ばかりであったわけではなく、別の場所から移住して来た居住者も少なくないのである。どのくらい住めば「石垣人」となるのか。郷友会研究にはこうした問題も含まれていることを指摘しておきたい。

## 第2章 石垣島の人口移動

### 第1節 石垣島への人口移動

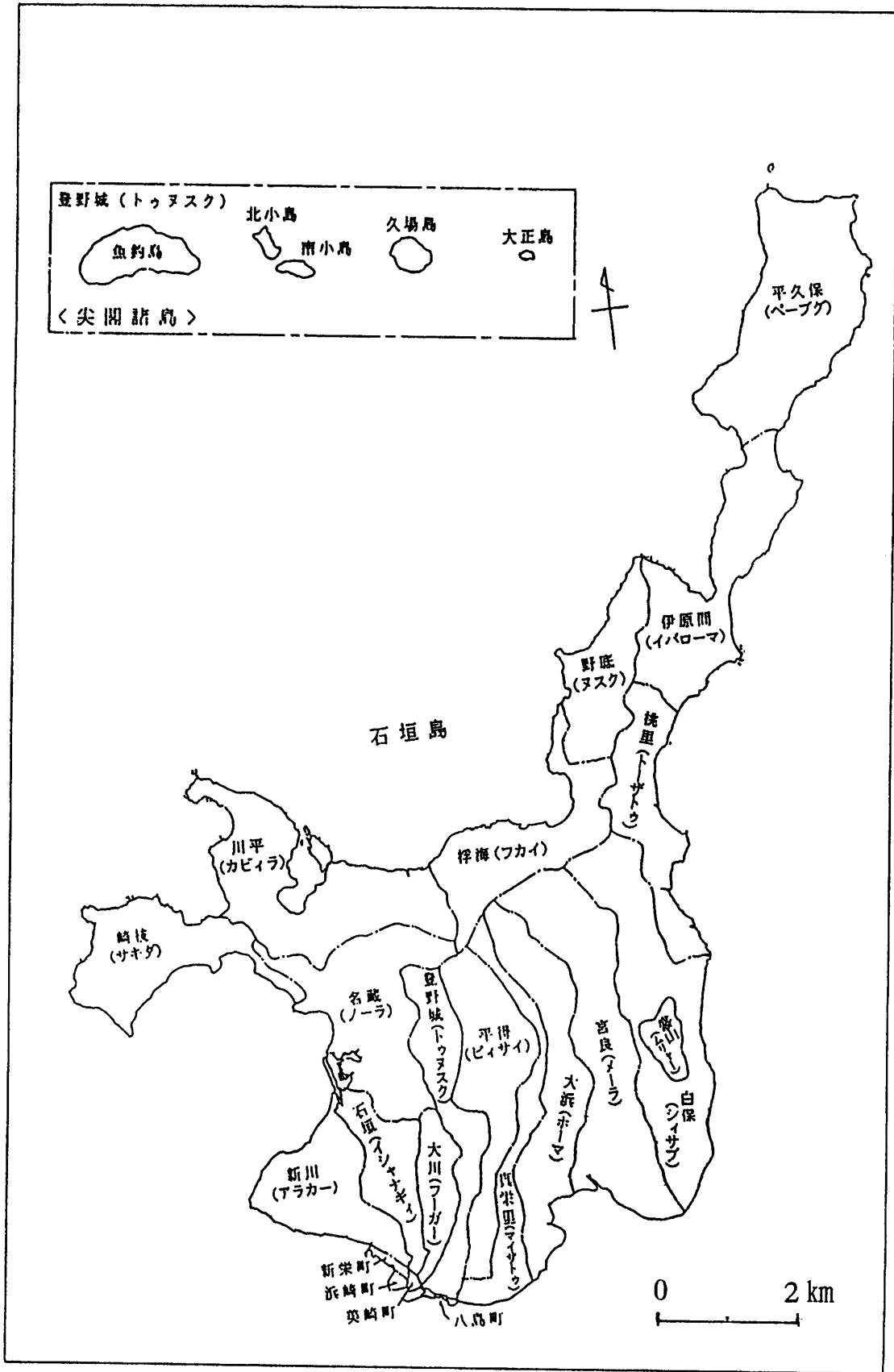
ここでは、近年の石垣島周辺離島からの石垣島への移住を除いて、これ以外の石垣島への移住について捉えてみたい。すなわち、1つは1771年の明和の大津波の際の周辺離島からの人口移動であり、もう1つは日本本土（以下、本土と略す）、沖縄本島（以下、本島と略す）、宮古島等からの人口移動である。前者は二百数十年前のことでもあり、事実を整理する程度にとどめ、より現代に関連する、すなわち郷友会研究にかかわる後者を中心に捉えたい。

筆者は『石垣市史』を来住者の視点から整理した結果、第1表と第2表という2つの表を得た。第1表は石垣島東部に位置していた旧大浜村への人口移動を、また、第2表は石垣島西部の旧石垣

第1表 石垣市旧大浜村の人口の変化

大字名	1771年 の人口	津波後の 生存者数	人口減少 の割合	移入者 数	先住地	1873年 の人口	昭和の 来住	先住地	移住の 形態	備考
1 平得	1178	624	47%	0		490	1938	本島+地元	計画	
2 真栄里	1176	270	77%	293	黒島	150	1957		計画	
3 大浜	1402	112	92%	419	波照間島	570				
4 宮良	1221	171	86%	320	小浜島	360	1945	本島4戸		
5 白保	1574	28	98%	418	波照間島	400		本土+本島+宮古		
6 盛山	0			0		17				
7 桃里	972	690	29%	0		34	1945	本島	計画+自由	一時廃村
8 野底	599	599	0%	0		28	1954	本島+宮古		一時廃村
9 伊原間	720	94	87%	167	黒島	38	1945	宮古20戸	自由	
							1957	本島	計画	
10 平久保	1207	748	38%	0		86	1945	宮古他9戸	計画+自由	

資料：石垣市史各論編民俗（上）より筆者作成



第1図 石垣島大字区界図

資料：石垣市史 13p を筆者修正

町への人口移動をそれぞれ整理したものである。記述の順序として、はじめに旧大浜村への人口移動、次に旧石垣町への人口移動について述べることにしたい。

## 1 旧大浜村への人口移動

第1表は2つの部分からなっている。すなわち、1つは明和の大津波に関する前半の部分であり、もう1つは昭和期とくに戦後の開拓移住を中心とした後半の部分である。前半の部分は今日の郷友会活動とはほとんど関係しないと思われるが、郷友会の前提としての人口移動に関わることなので、基礎的事実としておさえておきたいと考えた。

1) まず、明和の大津波がいかに大きな被害を与えたかがよくわかる。被害は石垣島の東南部の集落でとくに大きかった。その中でも最大の被害を受けた集落が白保であった。98%の人命が失われた。これに対し野底など北西部の集落はほとんど被害を受けていないことが対照的である。

人を失った各集落では、集落再建のために周辺離島からの移住者を受け入れている。この表によると、波照間島からの移住者が800名以上と最も多く、彼らは大浜と白保に入っている。次いで、黒島からの移住者が真栄里と伊原間へ、小浜島からの者が宮良へ、それぞれ移住している。

2) この表でもう1つ注目されるのは、1873年、大津波の約100年後の人口である。すなわち、この100年間で人口が急減したところがあることで、桃里、野底、伊原間、平久保、などの大字であり、これらは皆石垣島の北部に位置している。これに関して石垣市史は、これら北部とくに平久保半島はマラリアの猖獗地として恐れられていた土地で、人口減少はマラリアなどの風土病によるところが大であると記している。人口の減少にはこうした要因もあったのである。

3) 第1表の後半部分からは、主として戦後の開拓入植者の様子がわかる。石垣島への開拓移民は明治期から始まっており、このことについては後で触れるが、石垣島東部では、県の振興計画の下に計画移民が始まった昭和期以後のことのようだ。1938年に、県の計画の下に、本島本部村の出身者と地元民により、開南集落が創設されている。石垣島東部への戦前の開拓はこれだけで、後は全て戦後から1950年代にかけての入植である。入植者の出身地は沖縄本島と宮古島からの者が多く、とくに北部へは宮古からの入植者が多いようである。これらの入植者が郷友会に関わることは十分予想されることであろう。

## 2 旧石垣町への移住者

1) 石垣島西部、旧石垣町への明治期以降の最初の移住者は、糸満系漁民であった。(第2表) 明治末には、同じく本島の中部、屋慶名や北部からの移民が新川に住み着いている。彼らはサバニを持って移住したが、もともと半農半漁の生活者であったと言われる。また、彼らの中にはカツオ事業に関わる者もいた。以上のように、明治以降の初期の移住者は漁業関係者が多

第2表 石垣市旧石垣町への開拓等の移民

時期	移住者	大字名	集落	備考
1 1882(M15)	糸満系漁民	登野城	東小屋	海岸近く
		石垣	中小屋	
		新川	西小屋	
2 1910(M末)	本島20戸他 (屋慶名、本部 ヤンバル)	新川	屋慶名	半農半漁
			真喜良 舟蔵	
3 1890(M中)	徳島県人	名蔵		農業開拓
4 1935(S10)	台湾移住者	名蔵		
5 1945(S20)	宮古	川平	吉原	計画移民
			大嵩	自由移民
			仲筋	自由移民
			米原	計画移民
6 1952(S27)	本島	浮海	富野	自由移民
			伊土名	分離
			1956(S31) 宮古	
1962(S37)	本島+宮古	大田	自由移民	

資料：石垣市史各論編民俗（上）より筆者作成

かったようだ。

2) 農業関係者の移住者としては、1891年のそれまで禁止されていた開墾の解禁以来、本土の開拓家や県下の士族らによって入植が開始されたが、「いずれも資金難とマラリアと台風のために失敗し」<sup>1)</sup>ている。

こうした中で、砂糖生産のための大規模な甘蔗栽培をめざす試みが徳島県人中川虎之助により、明治中期に開始され、一時は「八重山糖業株式会社」が設立されて、徳島県や香川県から300名近くの入植者が名蔵の地に入ったが、1897年の台風によって壊滅的な被害を受け、失敗に終わっている。しかし、こうした過程の中で、四国からの移住者が石垣に入り、その一部が定着したのである。

3) つぎに、名蔵には1935年頃台湾から移住者が入り、現在でも中国風の祭りが行われていることが石垣市史に記されている<sup>2)</sup>。また、聞き取りによれば、1960年代の後半にも、当時景気の良かったパイナップル工場の人手として、台湾から名蔵に人が来て、そのまま居着いた者もいると言う。このように、名蔵には台湾からの移住者が住み着いていることがわかっている。彼らの現在の仕事は料理店、果物店などの他、観光関係の仕事をしている者もいると言う。

4) 最後に戦後の開拓移民である。その時期は終戦直後から1960年代前半にまでわたっており、入植地は川平の吉原、大嵩、中筋、浮海の米原、富野、伊土名、大田などのいわゆる裏地区と呼ばれるところである。このうち吉原は宮古からの米原は本島読谷村からの政府計画移民であって、その他は自由移民であり、全体としては宮古からの移住者が多いと言える。

以上、1) 初期の本島からの漁業移住者、2) 四国からの糖業甘蔗移住者、3) 台湾からの移住者、4) 戦後の農業開拓移民、についてそれぞれ見て来た。このうち、はっきりした郷友会を形成しているのは4) の中のとくに宮古からの移住者であり、その1つの下地郷友会の活動が知

られている。

### 3 姓による分析方法

石垣島居住者の出身地を調べる1つの方法として、その人の姓に注目し、それによって出身地を推測することができるという話を、聞き取りの際に聞いた。

今、仮に、こういう整理をしたとすると、一番多い姓は、宮良、石垣、大浜などの姓の地元石垣の人であり、次に多い姓は、金城などの姓を持つ本島の人であり、3番目は、砂川などの姓の宮古の人であると言う。この他、観光の仕事などを行っている、全国から来た人びとが約800世帯、すなわち約800姓存在しており、また、中国人などの外国人が300名ほどであろうと言う。

こうした方法による整理を行うと、どの程度の整理がなされ、どの程度のことがわかって来るのか大変興味のあることであるが、ここでは、今回こうしたヒントを得たことのみを記しておきたい。

## 第2節 石垣島から島外への人口移動

石垣島からの出郷者は何処にどれ位いるのか。また、彼らは郷友会をつくっているのか否か。こうしたことがここでの検討課題となるが、今回、この検討を十分に行うだけの資料を筆者はまだ持ち合わせていない。従って、部分的な検討となることを、はじめに断っておきたい。

石垣島から島外への人口流出の全体像はわからないが、これを類推する1つの手段として、竹富島のケースを見ておきたい。

1975年の時点で、「竹富人」の各地における居住状況は第3表のとおりであった。これによると、母村竹富島に住んでいる者は全体の10%未満にすぎず、90%以上が島外に出ており、そのうち最も多いのは沖縄本島で約45%、次いで石垣市が約28%、東京が18%となっている。

もちろん、石垣島出身者の場合もこれと同じであるとは限らないであろうし、石垣の中でも地域によって違うことも予想される。しかし、近隣島の1つの例として、参考にはできるであろう。

次に、竹富島出身者の最大の出先地であった、沖縄本島における石垣島出身者の状況を取り上げよう。1980年に琉球新報社により出版された『郷友会』は新聞に掲載したものをまとめたもので、沖縄本島で結成され活躍している郷友会についての情報が得られる。この中の石垣島出身者のものについてのみ取り上げ、整理してみた。(第4表)

まず、出身地の広さでこの表を見ると、1と2は旧町村単位、3、4、5、8は大字単位のものであり、6と7は集落単位のものとなっていて、大字単位のは大体1000人前後、集落単位のは100人台と、会の規模もこれら出身地の広さに対応している。

第3表 「竹富人」の居住状況

場所	人数(人)	割合
竹富島(母村)	342	8.9%
石垣市	1091	28.4%
沖縄本島	1717	44.7%
東京	693	18.0%
計	3843	100.0%

資料：沖縄竹富郷友会編：竹富  
2000年より筆者作成

第4表 沖縄本島在石垣郷友会

名称	郷里の場所	結成年	会員数(世帯)	活動内容	備考
1 石垣郷友会	旧石垣4カ村	1970	2万人(2千)	敬老会、郷里の援助	若者の会離れ
2 旧大浜町 郷友会連合会	旧大浜町	1975	2900人	大運動会、のど自慢大会、(敬老会)	
3 大浜アカハチ 会	大浜(大字)	1958	1200人	総会、敬老会、運動会 凧上げ会、ピクニック	
4 平真会	平得+真栄里 (大字)	1967	830人(254)	運動会、ピクニック	
5 宮良郷友会	宮良(大字)	1967	950人(290)	新年会、総会、名簿	赤馬青年会(1975) 老ク陽豊会(1976)
6 伊原間郷友会	伊原間集落	1967	120人(35)	敬老会、ピクニック 観月会、野球大会	
7 明石郷友会	明石集落	1970	155人(60)	ピクニック、野球大会	1955 63戸移住 1964 67戸444人 1979 38戸212人
8 白保郷友会	白保(大字)	1960	1200人	敬老会、ピクニック 運動会、生年祝	「ゆなむり新聞」

資料：琉球新報社編，郷友会 1980年より筆者作成。

会の結成は、早いものは1950年代の末、遅いものは1975年であるが、全体としては1967に3つ、1970年に2つの会が結成されており、この頃に多かった。

本島での各郷友会の活動内容は、よく似てはいるが違いも見られる。多くの会で共通して行われているのは、ピクニック、運動会、敬老会などであり、総会、野球大会、郷里への援助などを行っている会もある。ユニークなものとしては、凧上げ大会、新聞の発行などがある。

このほか、最大規模の石垣郷友会は、若者の会離れ傾向を活動上の問題点としてあげているが、これ以外の会はこうした心配をあまりしておらず、むしろピクニックや野球大会での若い人の活躍を伝えている。また、明石郷友会の母村である明石集落は、1955年に沖縄本島各地から集まった63戸の計画移住により、石垣島北東部の平久保半島に作られた開拓集落で、1964年には67戸と最大戸数になったが、その後、農業収入の低さなどから、1979年には38戸に減少している。再び故郷であった本島に戻ったものも多く、彼らは2つの故郷を持つと言う稀なケースである。

なお、この表には出てこない石垣の集落も存在するが、それは、郷友会が結成されていないためか、それとも存在はするが新聞に取り上げられなかったためなのかについては不明である。

### 第3章 石垣在郷友会の分析

#### 第1節 石垣在八重山諸郷友会の現状

第2章では石垣島をめぐる人口移動を扱い、その際、島外から石垣島へ来た移入者についても



扱ったが、ここでは八重山の離島からの近年の移入者については除外していた。本章では、この八重山の離島から石垣島へ移住した人の作る郷友会すなわち八重山離島出身者による石垣在郷友会について検討する。

検討の土台となる資料は石垣市の南山舎が発行している月刊誌「情報やいま」である。ここには各郷友会に対する調査に基づいた報告および島人アンケートの結果が掲載されている。期間は1999年から2002年にわたっているが、2001年の6月から12月までが中心である。

以下は、これらを整理した結果に基づくものである。

第5表 母村と郷友会の人数

島名	母村			郷友会			郷友会 / 母村
	人数	世帯数	人数/世帯	人数	世帯数	人数/世帯	
1 竹富島	293	158	1.85	1300	330	3.94	4.4
2 小浜島	537	276	1.95		240		
3 黒島	221	113	1.96	1000	300	3.33	4.5
4 波照間島	592	259	2.29	1000	300	3.33	1.7
5 鳩間島	59	33	1.79		120		
6 新城島	7	7	1	300	100	3	42.9
7 西表島	2095	1036	2.02				
8 与那国島	1781	768	2.32	2000	440	4.55	1.1
計(平均)	5585	2650	2.11	5600	1470	3.81	1.9

資料：竹富町：竹富町の概要 2003年、南山舎編：情報やいま  
2001年各号などより筆者作成。

1 まず、会の数とその規模を母村との比較を含めて示す。(第5表)

石垣在郷友会は、竹富町の7つの離島毎のものと、与那国島のものの合計8つが存在している。また、母村の人口と郷友会の人数とを比べると、資料のある会の全てにおいて、郷友会の方が母村よりも人数が多くなっており、与那国島や波照間島は1～2倍、竹富島や黒島では4～5倍と、いかに多くの人が石垣島に移住しているかがわかる。なお、1世帯当たりの人数を示したが、母村では平均2.11人であるのに対し、石垣では3.81人となっている。これは、子供の数が石垣の方で多いためではないかと思われる。

2 石垣在郷友会はいつ頃結成されたのか。整理の結果から、これは1950年代前半が中心であることがわかった。(これ以下の部分では、各会毎の資料の提示は省略し、これらを整理した結果のみを示すことにする。)

3 何故この頃に多くの会が作られたのか、すなわち、会結成の動機や目的については、親睦や相互扶助をあげている会が多く、また、これと似たものに「出身者の団結、融和」「心のよりどころ」がある。これ以外では、「島に結び付ける役割」(竹富)、「島を支え島を盛り上げていくこと」(波照間)など、郷里の支援を内容とするものがあつた。

4 会の主な活動を見ると、ほとんど全ての会で「親睦大運動会」を行っており、また、これが会

の中心的な活動となっている。「敬老祝賀会」もほとんどの会が行っており、「成人祝会」「生年祝賀会」を行う会も多く、「高校卒業生の激励会」を行うところもあった。また、在沖縄本島郷友会との交流や毎日駅伝大会、字別野球大会への参加など、交流、参加的な活動も行われている。

- 5 石垣在のこれらの郷友会は、故郷への協力とりわけ故郷の諸行事への協力を大変良く行っている。これは、次のような事情のためであると思われる。

1つは、離島ではあるが多くの会の母村が日帰りでも行き来できる距離にあることで、一番近い竹富島へは10分、やや遠い西表島や波照間島でも、高速船で40～50分の距離である。

もう1つは、母村より郷友会の方が人数が多いことがあげられよう。母村の中には郷友会の協力なしには行事が行えないところも生まれており、こうした所では協力が必要不可欠なわけである。この他、母村に残る者は高齢者の傾向が強いことも郷友会の協力を起こさせる一要因であろう。

母村の行事への協力では、豊年祭、結願祭、節祭などの伝統文化、伝統芸能への協力を行うケースが多いが、この他、小中学校の運動会への参加、協力なども行われている。

- 6 会内部の組織について見ると、これには大きく分けて2つの種類のものがあると言えよう。

1つは、会の中を母村の地域別で分けて、支会または班を設けている場合である。竹富では、西会、東会、仲筋会の3支会に、黒島では宮里、仲本、保里、東筋の4支会に、また西表でも、まるま会（祖納）、トゥバイラーマ会（干立）、カマドマ会（船浮）、うるち会（網取）の各集落毎の4つの支会が作られている。これ以外でも、班や組をサブグループとして設けている所が多い。

もう1つは、青年部、婦人部、老人クラブなどの会内部の団体で、とくに青年部を設けている会が多い。また、与那国のトゥグル会（棒術愛好会）のような民俗芸能を中心としたグループが出来ている会もある。

- 7 会が当面している課題や問題としては、2世、3世の郷友会への関心の薄さをあげる会が8分の7とほとんどであったが、1つの会では、青年部の活動や伝統行事への参加の中で故郷のしきたり等を学ぶので、あまり心配ないとしていた。

- 8 最後に、「情報やいま」は各母村の島人へのアンケートを行っており、その中で島居住者から見た石垣在郷友会に対する意識を尋ねているので、これについて触れておきたい。アンケートの間は郷友会の必要性について 1) 絶対に必要、2) 必要な場合がある、3) 必要なし、の3つの中から選ぶものであるが、3) の必要なしと答えたものはほとんどおらず、どの会でも1) の絶対必要がきわめて多くなっており、前述の島の行事への協力と良く対応した結果が出ていると言えよう<sup>3)</sup>。

## 第2節 石垣在八重山郷友会をめぐる諸問題

石垣島周辺の八重山離島民は、石垣島以外では何処にどのくらい移り住んでいるのか。これにつ

いての詳しいデータを、筆者は今、持ち合わせてはいない。しかし、沖縄本島に関しては1つのデータがあるので、これに基づいて、在石垣と在沖縄本島の郷友会について比較検討してみたい。

(第6表)

第6表 沖縄本島在八重山離島郷友会

郷友会名	結成年	会員数	活動内容	備考(特徴、課題)
1 竹富郷友会	1950	2500	運、敬、新、総、郷里支援	
2 小浜郷友会	1959	1800	運、敬、総、棒術の継承	民謡、三味線
3 黒島郷友会	1960	1500	運、敬、総、5支部ピクニック	機関誌さふじま
4 波照間郷友会	1962	250	運、新、総、5支部ピクニック	若い会員多い
5 鳩間郷友会	1973	660	民俗芸能の継承(婦人部)	鳩間島研究サークル
6 大原地区郷友会	1967	1000	ピクニック、新城節祭りの継承	
7 西表郷友会	1958	500	運、敬、新、総、学事奨励会	機関紙まるま
8 船浮郷友会	1971	50		
9 与那国郷友会	1956	5610	運、ピクニック	共同墓地、芸能祭
計		13870		

注：運：運動会、敬：敬老会、新：新年会、総：総会  
資料：琉球新報社編 郷友会 1980年より筆者作成。

- まず、結成年を見ると、沖縄本島の方は1950年代後半が多くなっており、石垣の方は、先に見たように1950年代前半に多かったため、郷友会の結成は本島の方が5年ほど遅れていることになる。これは、恐らく移住の時期のずれによるものではないかと思われる<sup>4)</sup>。
- 会員規模を見ると、会員数の合計は13,870人であるが、このうち在石垣郷友会の方でデータのある5つの会に限ると、10,860人となる。この5つの会の石垣の方の会員数は5,600人だったので、沖縄は石垣の約2倍の規模だということになる。さらに、この5つの会のデータに依拠して、母村の人口をも含めて以上のことを言い換えると、母村の人口は2,894人、石垣は5,600人、沖縄が10,860人となり、母村の人口の約2倍の人が石垣に、石垣の会員の約2倍が沖縄に居住しているということがほぼ推定できる。
- もう1つ検討しておきたいことは、郷友会の単位となる母村の範囲である。島単位で会を作っている場合は問題はないが、八重山の場合は西表島と新城島に関して検討が必要かと思われる。まず、第6表の西表郷友会は西表西部の集落の出身者から構成されており、東部は除かれている。また、この表の船浮はこの西表島西部の集落の1つであり、西表郷友会から分離独立したとも考えられる。

他方、この表の大原地区郷友会は、西表東部の出身者を含んだものであり、当初は西表東部郷友会と称していたものである。さらに、この西表東部の郷友会である大原地区郷友会には、新城島の出身者も加わっている。かつて新城島の島民が西表の大原地区に開拓入植したという経過があり、新城島民と大原集落の住民とは人的なつながりがあることが、これには影響しているであろう。

以上は沖縄本島での郷友会の姿であるが、石垣では新城郷友会が存在し、大原地区郷友会や西表東部郷友会は存在しない。新城郷友会と大原地区郷友会は名称は異なるが、実質は新城島を含めた

西表東部の郷友会であると考えて良いのかも知れない。なお、石垣にある西表郷友会は西表西部のみであり、この点は沖縄本島の場合と同じであると言えよう。

## 第4章 結 語

以上、石垣島周辺離島から石垣島に移住した人びとによって作られた石垣在郷友会の実態について検討した。最後に、沖縄における八重山地域の郷友会の考察を通して、改めて郷友会について考えてみたい。

1つは、何故奄美や沖縄は郷友会社会、郷友会が活躍する社会なのか、という点である。郷友会の目的は親睦や相互扶助であると良く言われる。これを、もう少し実態に近い言い方、あるいはより本質的とも言えるかもしれない言い方をすれば、郷友会は「心のふれあい」の会、または「社会の活力源的役割」を持っている会、と言えるのかも知れない。要するに、日常生活の中で心のやすらぎと元気を与えてくれる会、として機能していると言えそうだ、という点が1つである。

つまり、精神的な役割が1つはあり、これが基本のような気がするのである。同時に、会によっては助け合い等々の実質的な共同利益を兼ねる場合も、会の活動のところで見たように、少なくともとも言えよう。また、今精神的な役割と述べたが、これは「心の中だけ」のものという意味ではなく、その心の持ち方が現実の力となる面をも持っているということが重要であることも補足しておきたい。

何故、奄美や沖縄でこうした側面が強いのか。離島の持つ孤立共同体的な性格のせいなのか。または、別の地域的な特徴があるのか。こうした点については、さらに検討を要する課題であろう。

次に、とくに石垣在郷友会の特色として筆者が感ずる2点をあげておきたい。その第1は、故郷母村への協力の強さである。既に見たように、ほとんどの石垣在郷友会は、母村の行事とりわけ祭りなどの民俗芸能の行事の際に、帰島してその準備をしたり、踊りに参加したりしている。筆者は、名瀬市にある周辺集落からの人びとによって作られた、各郷友会について検討したことがあるが、名瀬の郷友会員も、たしかに母村の行事に協力するケースも見られたが、石垣の方がはるかにこうした性格が強いように感ずる。

この理由の1つは、石垣郷友会の人口の方が母村より平均して2倍と多いこと、また、母村が郷友会の助けなしには機能しにくくなっている所もあること等があげられよう。また、フェリーや高速船で比較的容易に行ける島が多いことも影響しているかも知れない。

もう1つは、運動会の活発さである。奄美の郷友会では、運動会を実施するには大変なエネルギーが必要である、旨の話聞いたことがあり、実際にはやらなくなっている傾向にあるのに対し、石垣では、活動内容のわかっている6つの会の全てで運動会が行われており、しかも、会の最も中

心的な活動として位置付けられ、また、実際にも多くの人に参加し、盛況だという。

さらに、もう1つあげるとすれば、民俗芸能の保存に熱心であることも付け加えることができよう。実はこれが運動会の際に披露されることもあり、両者は関連した面もある。

以上のような点が、奄美の郷友会と比べて筆者が感ずる石垣在郷友会の特色である。一言でいえば、より郷友会的な性格が強い、あるいは残されているということであろう。と同時に、こうした社会の方がより人間的な社会なのかも知れないとも感ずるのであるが、これらの点すなわち、何故石垣郷友会の方が名瀬の郷友会よりも郷友会的な性格が強いのか、また、現代社会における人間的な社会のあり方とは何なのか、などの点については、今後の課題としたい。郷友会研究は現代社会のあり方や、現代社会、日本社会の性格に対する問題提起をしており、こうした視点を含めてこれからの研究が進められる必要があるように思う。

---

## 注

- 1) 沖縄県 沖縄県史第7巻各論編6 移民 456 p
- 2) 石垣市史編集委員会 石垣市史各論編民俗(上) 96 p
- 3) 絶対必要と答えた会員の割合は会によって異なっており、そのパーセントのはばを示すと、最大の100%から最小でも54%であった。
- 4) なお、石垣島から沖縄本島への移住者の郷友会は、さらに遅れて1960年代の後半に多かったことは、先に見たとおりである。

## 文 献

- 石垣市史編集委員会編 1994. 『石垣市史各論編民俗(上)』 石垣市  
沖縄県編 1974. 『沖縄県史第7巻各論編6 移民』 沖縄県  
沖縄竹富郷友会編 2000. 『創立50周年記念誌竹富』 沖縄竹富郷友会  
竹富町 2003. 『竹富町の概要』 竹富町  
南山舎編 2001. 『情報やいま』 南山舎  
琉球新報社編 1980. 『郷友会』 琉球新報社